令和６年度学校総合評価

６　今年度の重点目標に対する総合評価

本校生徒は礼儀正しく、意欲を持って何事にも真摯に取り組むが、一方でさらなる自主性、主体性が望まれる状況にある。そこで、生徒が自分の能力・適性等を的確に把握し、高い目標を掲げ、意欲的に学習活動や学校生活に取り組むことを促す取り組みを継続している。

重点項目「学習活動」では昨年に引き続き『自学・自楽する18歳へ』と、学びと成長のウェルビーイングの達成」を重点課題として設定した。３年後に生徒評価が100%になることを目標とし、今年度は２年目であった。授業に対して主体的に参加したか、自主的な学習について自分自身の成長を実感できたかなどの項目においてアンケート調査を行った結果、100%とはいかないものの各項目は微増、または高い数値で推移していた。学校関係者からは教員が生徒との面談スキルを高めていくことの重要性を指摘いただいた。

重点項目「学校生活」では２つの重点課題を設定した。重点課題「基本的生活習慣の改善」ではスマートフォンを利用したSNSでの個人情報の正しい取り扱い、対話を通した生徒による校則の考察、自転車利用時のヘルメット着用を設定した。生徒との対話により生徒が主体的に判断している点について、学校関係者から押しつけではないあるべき指導の姿であるとの評価をいただいた。ヘルメットの着用率には課題を残している。

重点課題「健康的な環境づくりに努める知識や能力の向上」では清掃の意義を理解し効率よく清掃を行うことを目標とし、一定の評価を得たが、環境整備委員の活動があまり認知されておらず、生徒への周知方法に工夫が必要であることが課題として残った。

重点項目「進路支援」では「生徒一人ひとりの適性や能力を引き出す学習・進路指導」を重点課題として、自ら学ぶ集団作りと進路目標の設定を目指した。生徒自身の評価もおおむね目標を達成することができたというものであった。また、進路目標の設定についても、各種進路行事・講演会を行う上で学年との綿密な連絡を重ねた結果、昨年度の評価を上回った。

重点項目「特別活動の充実」では「非認知能力（10の力）を高める特別活動」を重点課題とし、工夫を凝らしたホームルーム活動の企画立案や行事への主体的な参加を促した。１０の力より抽出した６つの力の伸長を達成目標としたが、生徒の自己評価によると、各行事が生徒の成長機会となったことがうかがえる。職員・保護者・学校関係者からも高い評価を得ている。

重点項目「探究活動の充実」では「探究的学習の深化」を重点課題とした。一昨年度からSTEAM教育の推進校として、普通科の総合的な探究の時間においても深化した探究活動を進めている。こちらについても１０の力を利用したルーブリック評価を行った。自己評価が低いことは課題ではあるが、未来〇学など、新たな試みを始めたところであり、長期的な視点からの評価が必要であると考えられる。

７　次年度へ向けての課題と方策

昨年度と同様、各種取り組みに対しては教員同士の、より深い共通理解が必要であることが浮き彫りとなった。何を利用して、どのような力を育成するかという命題を、私たち教員が相互理解することが肝要である。今後ますます主体的・自主的な学習や行事への取り組みが重視されるのはもちろんのこと、「非認知能力（10の力）」を活用した生徒の育成も促進していきたい。

（様式3）

8　今年度の重点課題（学校アクションプラン）

令和6年度　富山高等学校アクションプラン　－1－

重点項目	学習活動
重点課題	「自学・自楽する18歳へ」と、学びと成長のウェルビーイングの達成
現　　状	本校では、「発展的未来に貢献する人間の育成」を目指し、進路実現と、卒業後のさらなる飛躍の土台となる資質能力の育成につながる教育を展開している。その中でも、学習活動の両輪となるのは授業と授業外の「自主的な学習」である。 「授業」に関しては、10年以上にわたり「学び合い」「ICT活用」など、手法や授業展開の工夫に重点を置いて取り組み、成果をあげてきた。今後はさらに、生徒自身がその授業に「受け手」ではなく「学びの創造者」としての意識をもって臨むことができるか、それをいかに促すことができるかを重点課題とし、生徒の一層の能力伸長につなげたい。 「自主的な学習」に関しては、授業の効果を高め内容が定着するような取り組みが十分になされていることの指標の1つとして、週28～34時間程度の時数が学年ごとに設定されている。学習量が少ない生徒に対しては、担任や授業担当者面談による声がけなどを行ってきたが、その効果が声がけによる一過性のものに終わらず、自発性の高まりによって継続するような指導をさらに工夫する必要がある。
達成目標	1 「授業」について：主体性を育む授業の実施と、授業を活かす生徒の意識の確立 ①生徒による授業参加の自己評価 「学び合い」や「教え合い」、「振り返り」などの活動を自らの学びの場として活かすことができた生徒の割合が100%となること。 ②授業に関わる事前/事後課題への取り組み その授業を効果的に受講するために課された課題への取り組みが100％となること。 1、2ともに、9月と1月に実施する学習生活実態調査時に生徒アンケートを実施する。各項目が、3年後に100%となることを目指す。 2「自主的な学習」について：学びと成長のウェルビーイングの達成 ①自分自身の成長の実感 日ごろの自主的な学習活動の結果、自分の思考力・判断力・表現力が向上したと実感した生徒の割合が100%となること。 ②持続可能性 日ごろの自らの学習活動が、高校の3年間にわたって持続可能なものとなっていると感じている生徒の割合が100%となること。 ③多様性 日ごろの学習活動が、自分自身やその目標に適合したものとなっていると感じている生徒の割合が100%となること。
方　　策	1　進路指導部との連携…進路学習係と担任・教科担当者との連携において、生徒が家庭学習に主体的に取り組める適正な課題の質および量を設定し、細かく調整するようにする。また、その際には授業と学習課題の有機的な結びつきを高めるとともに、実態としての個別最適化が実現されるように工夫する。 2　面接指導の充実…担任を中心とした個別面談を年間7回程度以上実施し、特に、学習に困難を感じている生徒や工夫が必要な生徒に対しては、ウェルビーイングの観点①～③の実態の把握と共有をはかりながら、対話的に指導を行う。 3　対話的な授業…教師の「授業構想」を基本としながらも、随時臨機応変の生徒間、生徒教師間の対話的な学びを促進する。 4　働き方改革の推進…教務規程や成績評価の業務の見直しを通して、教員自身が「自学・自楽」し、ウェルビーイングを体現する生き方、学び方の価値観を再構築する時間を創出する。

達成度

生徒アンケートの結果、4段階評価のうち高評価の上位1回答と上位2回答の割合とその変化を以下に挙げる。

①授業について

	とてもできた			とてもできた+できた		
	R7年1月	R6 年9月	R6年1月	R7年1月	R6 年9月	R6年1月
1 学年	21.4%	29.6%	23.2%	92.6%	93.0%	93.0%
2 学年	24.4%	20.8%	21.5%	89.4%	84.4%	85.9%

②授業に関わる事前／事後課題への取り組み

	とてもできた			とてもできた+できた		
	R7年1月	R6 年9月	R6年1月	R7年1月	R6 年9月	R6年1月
1 学年	20.5%	32.1%	**16.2%**	73.3%	80.2%	**74.6%**
2 学年	**21.8%**	**18.6%**	17.2%	**79.9%**	**78.3%**	82.0%

①自分自身の成長の実感

	ある			ある+どちらかといえばある		
	R7年1月	R6 年9月	R6年1月	R7年1月	R6 年9月	R6年1月
1 学年	19.7%	28.1%	**22.8%**	79.8%	81.9%	**82.0%**
2 学年	**23.5%**	**19.1%**	16.0%	**83.8%**	**78.8%**	76.2%

②持続可能性

	そう思う			そう思う+どちらかといえばそう思う		
	R7年1月	R6 年9月	R6年1月	R7年1月	R6 年9月	R6年1月
1 学年	42.3%	41.6%	**36.8%**	86.9%	84.4%	**87.3%**
2 学年	**33.3%**	**33.9%**	22.7%	**87.1%**	**88.6%**	82.0%

③多様性

	なっている			なっている+どちらかといえばなっている		
	R7年1月	R6 年9月	R6年1月	R7年1月	R6 年9月	R6年1月
1 学年	20.7%	27.2%	**27.2%**	78.0%	74.1%	**77.6%**
2 学年	**25.2%**	**22.5%**	14.5%	**78.6%**	**72.9%**	73.0%

表の白抜き数字は、138回生（現2年生）の各項目における数値の変化を示している。

具体的な取組状況	方策1、2について、引き続き各学年の学習係が中心となって面談の重点内容を企画し、担任を中心に面談を行っている。また、担任の面談だけでなく、教科担当者による面談も時期をとらえて行っている。 方策4について、昨年に引き続いて教務規程・内規などの整備を行ったほか、特に学年末において、成績評価業務を円滑かつ分析的に行い授業改善に生かせるよう、特別授業の編成を見直した。

評　　価	B	各評価項目の数値は微増となっている。	B	各評価項目の数値は微増または高い数値で推移している。

学校関係者の意見	方策2で多様な生徒への対応として、教員が持つべき面談の力は不可欠となっているが、「面談力」の共有は図れているか。 アクションプランに対して、学校としてよく対応していると思う。
次年度へ向けての課　題	方策2の生徒面談はおもに昼休みや放課後に行うことになる。生徒面談をきめ細かく行うことは重要であると考えているが、回数を増やしたり長い時間をかけて行うことは、生徒の主体的な活動や学びの保障のための55分授業の導入や、方策4の働き方改革の推進と相反する側面を持つ。これらを両立させるために、さらなる事務的業務の効率化を進めるとともに、限られた回数と時間の中で密度の高い面談を行い生徒の気付きを引き出す高い「面談力」が教職員に求められれている。 今回の結果を踏まえて、本校スクールポリシーとの関りを考えながら、学びと成長の支援のあり方を模索していきたい。

（評価基準　A：達成した　B：ほぼ達成した　C：現状維持　D：現状より悪くなった）

令和6年度　富山高等学校アクションプラン-2-

重点項目	学校生活	
重点課題	基本的生活習慣の改善	健康的な環境づくりに努める知識や能力の向上
現　　状	本校では、昨年度生徒手帳を改訂し服装および頭髪については「清潔端正」とのみ示している。従来の頭髪服装指導はなくなり、自由な服装・頭髪が現れてきている。 『生活あっての学習』を掲げ、規則正しい生活習慣の確立をめざしている。しかし、スマートフォン等を長時間使用し、学習に支障をきたす生徒も見受けられる。 自転車通学生が多いが、推奨されているヘルメットの着用はなかなか定着しない。イヤホン装着運転をしている生徒も散見され、改善していく必要がある。	日常の清掃及び月例大掃除の指導を通して、環境を整えることの意義や協力の大切さ、効率的な時間の使い方等を理解し始めた生徒が増加傾向にあるが、以下のような課題がある。 ・積極的に掃除をしたいが、掃除担当メンバーでどのように掃除をしたら効率よく綺麗に掃除ができるのかの共通理解ができていない。 ・手際よく掃除を行うための道具の整備が整っていない。
達成目標	1　服装・頭髪については、共生のために定められているルールに基づいて主体的に判断させるため、生徒会と教職員の対話の機会を前期・後期で1回ずつ設ける。 2　スマートフォンの、学習活動・生徒間連絡利用以外の使用時間短縮等、自己の行動、生活をマネジメントする。個人情報のSNSへの安易な書き込みの防止。ネットパトロール等外部から指摘を受けるような他人の個人情報掲載、著作権違反、他への中傷記載などなくす。 3　交通ルール・交通マナーが遵守されるよう、特に自転車の安全運転について重点的に指導し、事故の防止を徹底する。	・各掃除場所の掃除の手順書を作成し、それを基に掃除担当メンバーで効率よく綺麗にできる掃除方法の共通理解を持つ。 ・掃除ロッカーの整備をする。
方　　策	1　年2回の生徒会と教員の対話や担任面接を通して、服装・頭髪について生徒が主体的に判断できるように促す。 2　スマートフォンは学習活動・生徒間連絡に不可欠なものとなりつつあるが、生徒に対して講演会を実施するほか、教員・保護者が連携して生徒の現状把握に努める。 3　年間8回の校門指導・電停での見守りを通して、交通安全をさまざまな機会を通じて啓蒙する。	・環境整備委員を中心に各掃除場所の手順書を作成し、効率よく綺麗にできる掃除方法の共通理解を図る。 ・環境整備委員を中心に各ロッカーに必要な掃除道具と数の一覧を作成し、誰もが掃除道具の把握ができる状態にする。
達 成 度	1　年2回の生徒会と教員（生徒指導部・特活部）間の対話を持つことができた。　100% 2　ネットパトロール等外部からの指摘　0件 3　ヘルメット着用率は呼びかけるもなかなか伸びない。	①　掃除の手順書を掲示し、掃除の仕方の共通理解が得られる努力をした。 ②　各掃除ロッカーに、該当掃除箇所のシールを貼り、内部に必要な掃除用具の必要数を掲示した。必要に応じて掃除ロッカーの位置を変更した。
具体的な取組状況	1　前後期とも生徒指導部・特活部と生徒会で服装・頭髪等について対話を持つことができた。生徒会からの希望で、猛暑期間には制服選択制を試行することもできた。 2　1学期に講師を招いて1学年対象のSNS安全教室を開催し、ネットトラブルの予防と解決について学ぶことができた。 3　年間8回の校門指導を通して、さわやかに交通安全・清潔端正な服装や頭髪を呼びかけた。	①　昨年度の環境整備委員会が作った掃除の手順書を掃除ロッカーに掲示し、掃除の共通理解が得られるようにした。 ②　例年は掃除用具の点検を、年度末に1回で実施していたが、今年度は学年ごとに3回で実施した。掃除ロッカーに、該当掃除箇所のシールを貼り、内部に必要な掃除用具の必要数を掲示した。必要に応じて掃除ロッカーの位置を変更した。
評　　価	B　①一方通行の「指導」ではなく、生徒が自発的に校則について考えることができた。 ②個人情報の書き込みの危険性は周知できていると思われる。 ③ヘルメット着用をどう呼び掛けていくかが課題である。	B　①　掃除の手順書を作成し掃除ロッカーに掲示したが、アンケート結果より生徒への認知度は54%であった。 ②　年度末までには、全ての箇所で整備が整った。
学校関係者の意見	締め付けの指導ではなく、対話を重視した指導を行っており、あるべき姿だと感じた。 ヘルメットに関しては、事故防止の側面もあり、着用を勧めてもらいたい。	環境整備委員は積極的に活動しており、学校保健委員会での発表も素晴らしかった。やはり生徒への周知がポイントである。
次年度へ向けての課　題	①今後とも生徒（生徒会）と対話を続けていくことが大事であり、その機会を設定する。 ②外部からの指摘はなかったが、個人情報書き込みの危険性を、常に啓発する必要性を感じる。 ③ヘルメット着用についても生徒会を巻き込んで呼びかける。	①HRなどで掃除についての共通理解を話し合う時間を確保する。 ②次年度に向けて掃除の点検強化

（評価基準　A：達成した　B：ほぼ達成した　C：現状維持　D：現状より悪くなった）

<table>
<tr><td colspan="5">令和6年度　富山高等学校アクションプラン　-3-</td></tr>
<tr><td>重点項目</td><td colspan="4">進路支援</td></tr>
<tr><td>重点課題</td><td colspan="4">生徒一人ひとりの適性や能力を引き出す学習・進路指導</td></tr>
<tr><td>現　　状</td><td colspan="4">1　本校では、週間課題を生徒に課しているが、自らの進路意識が薄く課題を「やらされている感」を持っている生徒が年々増加しており、課題提出率が低くなってきている。
2　本校では、生徒の進路意識の向上と学習意欲の喚起を目的に、折に触れて様々な進路行事を開催している。さらに外部講師を招き、1・2・3学年とも進路講演会を行っている。これらによってモチベーションを高める生徒がいる一方で、進路意識が高まらない生徒も散見される。</td></tr>
<tr><td>達成目標</td><td colspan="2">1 「自ら学ぶ集団」を作る進路指導の実現
・課題の量・取り組み方の指導について教員側が工夫をこらし、生徒が自主的に取り組めるようにする。進路実現のために自ら課題に取り組む生徒の割合80%以上。</td><td colspan="2">2　進路目標（志望校）の設定
・各種進路行事・外部講師を招いての進路講演会を通じて目的意識を持って学習に取り組むようになった生徒の割合80%以上。
・目標とすべき志望校が、第2学年が終了するまでには決定している。</td></tr>
<tr><td>方　　策</td><td colspan="4">1　教員側が各教科の指導において、いつどのような課題を与えてどんな力をつけるかを工夫し、生徒によく理解させ、自主的に課題に取り組ませる。
2　学年集会や面談等を利用し、進路を考える機会とする。
3　高い進路目標を持つ集団を、補講や大学志望別集会などを通じて早期に形成させ、お互いに切磋琢磨できる環境を学校生活のさまざまな場面で育成するように努める。
4　学習支援講座や講演会、「進路のしおり」等を通して、生徒にとって必要かつ有意義な情報の提供ができるように努める。
5　社会人や大学生を招いたキャリア教育により、主体的に「学びに向かう力」を育むことができるように支援する。</td></tr>
<tr><td>達 成 度</td><td colspan="2">1について
　アンケートは1学年85.0%、2学年75.4%であった。課題の量・取り組み方の指導については、課題の意義に関して教職員間での共通意識を確認することから始める必要があり、継続して取り組む必要がある。職員全員参加の学習指導委員会や学年懇談会、各教科部会や学年会で話題にして、自学できる集団を作っていきたい。</td><td colspan="2">2について
　アンケート結果は1学年86.3%、2学年80.9%であった。進路行事としては、1学年は「文理選択について」、2学年は「夢を持つことの大切さについて」、3学年は夏休み前に「入試本番に向けて」など、外部講師を迎えて進路講演会を行った。生徒の事後アンケートにおいても、満足度が高く、前向きな感想が多かった。</td></tr>
<tr><td>具体的な取組状況</td><td colspan="2">　週間課題について、全体量が増えすぎないように、学年会などで、各教科の課題提出状況を把握し、教科のバランスを取りながら、生徒に提示し、取り組ませている。自律的な学習が家庭でできるように、教科書発展レベルの選択課題も意欲のある生徒に提示している。</td><td colspan="2">　各種進路行事や講演会を行うにあたり、学年と外部講師の間で、目的や強調してほしいことなどの事前打合せを丁寧に行い、生徒にとって有意義なものとなるように取り組んだ。</td></tr>
<tr><td>評　　価</td><td>A</td><td>アンケート結果では、おおむね目標を達成することができた。継続して努力していきたい。</td><td>A</td><td>1、2学年とも、昨年度の結果より向上し、目標を達成することができた。</td></tr>
<tr><td>学校関係者の意見</td><td colspan="4">　子供達は元気に学校へ通っている。本校のレベルの高い進路指導や先生方の愛情のこもった指導のおかげと感謝している。ただ、もう少し生徒に主体的に考えさせてもよいのではないか。自らが主体的に考えることで意識が高まる側面もあると思う。</td></tr>
<tr><td>次年度へ向けての課　題</td><td colspan="2">　週間課題についての教員側の共通理解が必要と考える。各教科、いつ、どのような課題を与えて、どんな力をつけさせるのか、教科部会を開くなどして、3年間を見通した支援のあり方を検討し、充実させていきたい。</td><td colspan="2">　進路講演会等では、講師の選定及び事前打ち合わせが大切であると考える。学校、各学年の思いを外部講師に伝え、効果の高い講演会を適切な時期に実施していきたい。</td></tr>
</table>

（評価基準　A：達成した　B：ほぼ達成した　C：現状維持　D：現状より悪くなった）

<table>
<tr><th colspan="5">令和6年度　富山高等学校アクションプラン-4-</th></tr>
<tr><td>重点項目</td><td colspan="4">特別活動の充実</td></tr>
<tr><td>重点課題</td><td colspan="4">「非認知能力（10の力）」を高める特別活動</td></tr>
<tr><td>現　　状</td><td colspan="4">富山高校は、伝統的に教科指導はもとより、特別活動も盛んにおこなわれてきた学校である。令和5年度には、生徒会則が見直され、生徒主体での組織運営をより志向したものとなった。また、体育大会や文化活動発表会、予餞会といった行事に生徒の意見をできるだけ反映させることを試みたり、生徒と教員が対話的に生徒心得の見直しを行うなど、伝統は今に受け継がれている。
こうした流れを継承しながら、令和6年度より明示された「10の力」のうち、特に①主体的行動、③規範意識、④対話、⑤協働、⑧創造性、そして⑩慎重敢為の6項目の伸長を図り、本校の教育目標「人類の発展的未来に貢献する人間の育成」に資する環境を整えていくことが、今年度以降の課題となると考えられる。</td></tr>
<tr><td>達成目標</td><td colspan="2">1 「特色のあるホームルーム活動」を対話的に計画し、実施したクラスの割合：100%</td><td colspan="2">2 「10の力」のうち、①主体的行動、③規範意識、④対話、⑤協働、⑧創造性、⑩慎重敢為の伸長を実感する生徒が増えること
※今年度の結果をもとに、次年度以降の具体的な数値目標の策定を検討する。</td></tr>
<tr><td>方　　策</td><td colspan="4">1　前期のホームルーム活動を踏まえて、後期のホームルーム計画時に投げかけを行う。
2-1　昨年度の生徒会則の変更に基づいた生徒会の運営を支援する。
2-2　開催時期や内容が課題となっている体育大会に関して、R7年度の実施形態を検討しながら、R6年度体育大会内容の見直しを行う。また、文化活動発表会の普通科クラス展示について、総合的な探究の時間との学びの接続を模索し、充実を図る。
前提として、教育目標および「10の力」について、生徒と十分に共有を行う。また、教職員自身も生徒とともに「10の力」の伸長に努める。</td></tr>
<tr><td>達 成 度</td><td colspan="2">1 「特色のあるホームルーム活動」を対話的に計画し、実施したクラスの割合：63%（今年度は1学年、2学年の全クラスで実施）</td><td colspan="2">2　10の力のうちの6つの力が特活行事で伸長したと実感した生徒の割合90%（実感27% +気がする 63%）ルーブリック段階評価の変化①+0.25　③+0.24　④+0.20　⑤+0.22　⑧+0.28　⑩+0.59</td></tr>
<tr><td>具体的な取組状況</td><td colspan="2">後期に「ホームルーム企画賞」を実施し、各クラスに独創的なホームルームの対話的な企画立案、実施を促した。「富山高校百人一首」、「新たなスポーツを作る」など工夫を凝らした活動がみられた。</td><td colspan="2">各行事は、生徒主体で運営する伝統を大切にしながら進めた。体育大会はコロナ後、熱中症対策をしながら実施する方法と内容についての型を作ることができた。文化活動発表会では、クラス展示の評価基準として「10の力」を活用した。また、制服選択制の試行や北辰協議会の立ち上げなど、生徒が主体的に対話し、決定し、実行することを支援した。</td></tr>
<tr><td>評　　価</td><td>B</td><td>100%実施とはならなかったが、1，2年生全クラスで実施できたことは次年度以降の活動内容の充実につながると考えられる。</td><td>B</td><td>生徒同士あるいは生徒と教員の対話・協働により行事運営を進めることで、各行事を生徒の成長機会とすることができた。非認知能力（10の力）の自己評価を通年で行ったこと、行事の中でそれを活用する試みができたことは前進であった。</td></tr>
<tr><td>学校関係者の意見</td><td colspan="4">「10の力」に関しては生徒達自身に目標設定をさせてもよい。また、絶えず様々な場面で教員が意識して指導することが肝要である。
他校では失われつつある伝統や校風が、教員や生徒が変わっても、今なお脈々と受け継がれている。進学と人間性の涵養という両方の観点で教育が行われていると感じる。</td></tr>
<tr><td>次年度へ向けての課　題</td><td colspan="2">HRの企画作りを通して、答えのない問いを考えたり、対話を促したりすることができた。企画賞の表彰の有無に関わらずそうした対話がなされることが理想であるが、創意工夫のモチベーションとなるのであれば次年度継続することも検討したい。また、今年度実施された企画を生徒会誌などを通して共有、継承し、HR活動の充実に結び付けていきたい。</td><td colspan="2">特活行事について、6つの力を高める機会があるかを問うアンケートの回答は機会が多い35%、機会がある54%であり、改善余地がある。特別活動の隅々まで目的や目標、評価を意識することになれば、堅苦しさも感じられるようになることには留意しながらも、現状は行事の内容を充実させていくヒント、道標として「10の力」の活用を模索していく途上にあるといえる。生徒がやりたいことと、本校の特別活動の目的や目標とを二項対立にしないことを心がけ、その止揚をとっていくことが、今後さらに重要になると考えられる。</td></tr>
</table>

（評価基準　A：達成した　B：ほぼ達成した　C：現状維持　D：現状より悪くなった）

令和6年度　富山高等学校アクションプラン-5-

重点項目	探究活動の充実
重点課題	探究的学習の深化
現　　状	探究科学科設置から10年が経過し、探究科学科の活動と指導に関しては大筋の方向性が定まってきた。一方で、普通科の総合的な探究の時間においても自ら課題を発見し、教科での学びを生かしながら論理的に最適解を考えていく探究的な活動が求められている。探究科学科と普通科のいずれにおいても、社会や事象を俯瞰的に眺め「課題」を発見し、「対話」や「協働」的作業を通して解決していく力や、知識や情報を再構成して「新たな価値」へと繋げていく力を育む効果的な教育課程が求められている。

達成目標	①「対話」と「協働」的な学びにより深められる「主体的行動」	②「考えるための技法」により深められる探究的学習
	※単元ごと、及び成果発表後の自己評価 「富山高校で育む10の力」ルーブリックを活用し、「対話」的かつ「協働」的活動において、ルーブリック評価の結果で、4の生徒が90%以上となるようにする。	※各学期末、及び成果発表会後の指導者評価 評価の実施が年間を通して100%となるようにする。

方　　策

1. 探究的な学びが今後の進路や社会活動に深く関わることを理解させると共に、自己の「主体的行動」だけでなく他者との「対話」や「協働」によりその学びがより深まることを生徒が実感できるように指導を計画する。
2. 「探究基礎Ⅰ」「探究基礎Ⅱ」「理数探究」「総合的な探究の時間」及び「未来〇学」の指導内容・指導方法を十分研究し、授業担当者間で共通理解と綿密な連携を計りながら実施する。
3. 探究科学科の巡検研修や東京方面研修、普通科のフィールドワーク等において、教室での学びがより高度に実践されるよう計画すると共に、事後の自己評価により確認する。
4. 情報機器を適切に操作する技能を習得させ、取得した情報を扱うための「情報倫理」や探究的な活動を行う上での「研究倫理」を理解させる。
5. 取得した情報を「比較」したり「分類」したり、「関連付ける」などの「考える」ための活動を随時取り入れたか学期毎に確認する。

達成度

（1～4の選択肢：ルーブリック参照）

対　話

1年	4月		9月		1月	
1	17人	7.1%	11人	4.6%	11人	4.6%
2	73人	30.4%	51人	21.3%	51人	21.3%
3	123人	51.3%	130人	54.2%	130人	54.2%
4	27人	11.3%	48人	20.0%	48人	20.0%
2年	**4月**		**9月**		**1月**	
1	12人	5.0%	5人	2.1%	5人	2.1%
2	32人	13.3%	39人	16.3%	39人	16.3%
3	103人	42.9%	113人	47.1%	113人	47.1%
4	89人	37.1%	79人	32.9%	79人	32.9%

協　働

1年	4月		9月		1月	
1	13人	5.4%	9人	3.8%	9人	3.8%
2	100人	41.7%	55人	22.9%	55人	22.9%
3	109人	45.4%	137人	57.1%	137人	57.1%
4	18人	7.5%	39人	16.3%	39人	16.3%
2年	**4月**		**9月**		**1月**	
1	18人	7.5%	9人	3.8%	9人	3.8%
2	49人	20.4%	38人	15.8%	38人	15.8%
3	102人	42.5%	120人	50.0%	120人	50.0%
4	67人	27.9%	69人	28.8%	69人	28.8%

100%（本年度は2学年課題研究担当者のみに実施）

本年度の課題研究担当者全員が、各担当班の指導に工夫を凝らし「考えるための技法」を用い、探究活動がより深まる工夫を行った。

ただし、「理解して自分で考えを深めていける生徒、そうでない生徒の差が大きく、分担して協働して行う実験と比べ、できる人だけで考えを深めていく傾向がみられる。」や、「予備実験の重要さやその意図を理解しないで、早く結果をだすことを求めるあまり、自分たちの判断で探究を進めようとする傾向があった。」との意見も聞かれ、「考えるための技法」の指導の後の指導にも工夫が必要である。

具体的な取組状況

1. 下記の2.～4.の対策に関して、比較的多岐にわたる取り組みを行ったが、5.以外の各取り組みにおいて「協働」と「対話」を意識した計画が十分でなかったため、今回の結果につながったと考える。
2. 「未来〇学」や「総合的な探究の時間」の担当者からの細かな指導内容の提示により、指導の目線あわせを密に行った。特に、1学年の「未来〇学」に関しては、フィールドワークや企業連携など、本年度初めてとなる取り組みがあり、かつ、クラスを解体して取り組んだため、指導者間の連絡を密にし、生徒ができる限り多くの生徒と関わり合う、「対話」と「協働」の機会を増やす工夫をした。
3. 2学年の「東京方面研修」では、研修先を精査し「協働」となる機会を増やした。生徒の研修目標達成度の自己評価では、「達成できた・十分達成できた」本年度生は97.5%、昨年度生は96.0%と微増した。
4. 1学年を対象に、アンケートフォーム作成学習の前に「データサイエンス」と「情報倫理」に関する講座を実施。講座後の、アンケートを取る際の倫理面に関して「アンケート質問項目作成時の注意点を守ることができるし、なぜその注意点があるかを理解できた。」「アンケート質問項目作成時の注意点を守ることができるし、なぜその注意点があるかを理解するとともに、他に留意事項がないか考えることができる。」と答えた生徒の割合が67.0%だった。情報倫理を初めて学んだことを考慮すると、概ね妥当の数字だと判断する。また、2学年対象に外部への発信物を制作する前に「著作権」に関する講座を行った。

5.
【数学班】収集データをエクセルを用いてグラフ化したり、プログラミングを使って計算を行わせた。
【物理班】作図による結果予想を行ったり、データの正確さ・妥当性等を検討し考えさせた。
【化学班】予備実験のための時間を取り、器具・試薬・機材の違いによる試行錯誤を行わせた。
【生物班】あらかじめ、実験データをどの様な観点から統計・分析するかを検討させた。
【情報班】AIに学習させるデータ量を変えたときの、AIの判定の精度の変化・判定傾向の変化を「比較」させた。更に「判定精度」についても、正答率、再現率、適合率をそれぞれ計算して「比較」することで、判定傾向を探らせた。
【地歴公民班】比較から関連性を考察させたことにより、研究を進める妥当性までを考えさせた。
【英語班】データの分類が適切なものとなるよう検討させた。
【国語班】小説での描写方法を観点別に点数化し、レーダーチャートも作成し考察させた。

評　　価

C	A
生徒の日々の活動を教員側から見ると、「対話」的かつ「協働」的活動においてルーブリックの4と答えそうな生徒が90%以上いるように思えるが、生徒の自己評価はかなり低いので、評価の判断基準に問題があったと思える。3年生の1月においても、4を選択した生徒は「対話」では34.2%、「協働」では30.4%と学年を追うごとに割合が増加しているが、同様に自己評価は低い。	2年生の探究科学科の課題研究では、「考えるための技法」を用いた指導は十分に行われている。ただし、更に深めるようとすると困難な点がいくつか見られた。

学校関係者の意見

評価について、「対話」と「協働」的な学びにより深められる「主体的行動」がC、「考えるための技法」により深められる探究的学習がAとなっている。両者の評価基準における差はどこからくるものなのか。検討の余地がある

次年度へ向けての課　　題

2学年普通科「未来〇学」で、どのように探究活動を深めるか。
担当教員への探究活動に対する手法の周知・研究。

（評価基準　A：達成した　B：ほぼ達成した　C：現状維持　D：現状より悪くなった）